

朗読における「言う」の発音に関する研究

尾崎 喜光[※]

Research Note on the Pronunciation of "Saying" in Japanese When Reading Aloud

Yoshimitsu OZAKI

1. はじめに

動詞「言う」やそれが形式化した「～という」等の語幹「言」の発音には、本来の「い」に加え「ゆ」も行われていること、そしていずれで発音されるかは直後の活用語尾の発音により傾向が大きく異なることについては、テレビドラマ『渡る世間は鬼ばかり』(6番組)のセリフ(データ総数618件)を分析した結果を尾崎喜光(2017)で報告した。「ゆ」で発音された数値を示すと次のような序列となる(なお「言お」はたまたまこの6番組に現われなかった)。

言い (0.0%) < 言え (4.8%) < 言っ (19.6%) < 言わ (58.8%) < 言う (100.0%)

活用語尾が「い」となる「言い」では、「ゆ」は全く現われず全て「い」であった。逆に活用語尾が「う」となる「言う」では全て「ゆ」であり、「い」は全く現れなかった。仮名で表記すると「いう」であるが、実際の発音は全て「ゆう」であったということである。

これら以外のときは「い」と「う」の両方が現れたが、「ゆ」が現れる傾向が強いのは活用語尾が「わ」のとき(58.8%)であるのに対し、「い」が現れる傾向が強いのは活用語尾が「え」のとき(4.8%)であった。活用語尾が「っ」のときはその中間に位置づけられた。こうした序列は、語幹「言」の「い」から「ゆ」への変化の順序とも対応しているものと考えられる(上記の右側ほど早く「ゆ」に変化した)。このような違いが生じる原因については、活用語尾の音と語幹の音に関する調音音声学的観点からの説明を試みた。

そして分析の最後で、今後の課題の一つとして次のことを指摘した。

テレビドラマのセリフの調査によれば、活用語尾が「う」である「言う」の語幹は「ゆ」で安定していたが、非常に丁寧に話す場面では、現在でも「い」が現われるのではないかとも思われる。会話の「場面性」という視点も取り入れた展開が望まれる。

キーワード：発音の変化, 朗読, 『たけくらべ』, 「言う」, 「ゆう」

Keywords: change of pronunciation, reading aloud, "Tzkekurabe"

※ 本学文学部日本語日本文学科

指摘した「非常に丁寧に話す場面」に関する調査は現在未着手であるが、これに準ずる改まった言語場面に、書かれた文や文章を音読したり朗読する場面がある。普通に話すときは「ゆ」であっても、音読したり朗読するときは「い」となることがあるのではないかとということである。実際に次のようなケースがあった。

神戸市にあるキリスト教会（プロテスタント）のクリスマスイブ燭火礼拝に、2017年12月に出席したときのことであった。それまでもこの教会の礼拝には時々出席させていただいたが、燭火礼拝の説教で、「言った」「言って」をほぼ全て「ゆった」「ゆって」と発音していた当教会の牧師（40代男性・福島県出身）が、『聖書』（新共同訳）の「ルカによる福音書」第2章第10節～第11節を会衆の前で読んだとき、冒頭の「天使は言った」の「言った」を「ゆった」ではなく「いった」と発音していることに気づいた。新共同訳は総ルビであるが、「言った」は誰でも読める簡単な言葉であることを考えると、ルビが「い」となっているから「いった」と発音したというよりも、「言」という漢字を見て「い」と読んだものと考えられる。通常の話し言葉では「ゆった」であっても、音読・朗読するときは「いった」となる一つのケースとして注目した。

そこで、音読・朗読するときに語幹「言」をどう発音しているのかについて、同一人物が普通に話すときの発音と比較しての試行的調査を行なった。結論をくだすには十分なデータ量とは言い難いが、ある人物のケーススタディとして、研究ノートという位置づけでその分析結果を報告する。

2. 分析対象とするデータ

分析対象とするデータは、朗読家・幸田弘子氏（1932年生まれ・東京都出身）による朗読の発音と、同氏がテレビアナウンサーと対談したときの発音である。

公益財団法人放送番組センターが運営する「放送ライブラリー」（横浜市）には、民放やNHKが過去に放送したテレビ番組・ラジオ番組のうち約18,000本が蓄積・整理され、無料公開されている。先に述べた『渡る世間は鬼ばかり』のデータもここで収集したが、今回もここでデータを収集した。

公開されている番組の一つに、かつてNHKが制作・放送した次のテレビ番組がある。

『よみがえる一葉 樋口一葉・没後百年〔1〕～〔5・終〕』（1996年11月放送）

番組名にあるとおり、当番組は、日本の小説家・樋口一葉（1872年～1896年・東京都出身）の没後100年を記念して制作・放送された全5回の番組である。毎回、番組案内役の葛西聖司アナによる樋口一葉の解説と、幸田弘子氏（放送当時64歳）による樋口一葉の短編小説『たけくらべ』の朗読（コーナー名は「テレビ文学館 たけくらべ」；5回に分けて朗読；作品の一部は朗読省略）、樋口一葉の関係者への葛西聖司アナによるインタビュー（対談）から構成される、1回45分の番組である。第5回（最終回）のインタビュイーは、朗読を担当した幸田弘子氏である。

そこで、第5回のインタビュイーとしての幸田弘子氏の発音と、全5回の朗読における同氏の発音を分析対象とし、前者（通常の話し言葉での発音）と比較した場合、後者（朗読での発音）に異なる傾向が認められるか否かという観点から分析を行なうこととする。

朗読は毎回24分前後で、合計約120分（約2時間）である。調査は2018年2月と4月に同ライブラリーにおいて行なった。

なお、第5回のインタビューの中で幸田弘子氏は、「朗読」とはいうものの樋口一葉の作品は暗唱しており、じつは本を手を持って読んでいるわけではない旨のことを述べている。従って、本番組における朗読は、厳密な意味での「朗読」ではないが、かと言って通常の話し言葉として発話しているわけではもちろんなく、聞いているといかにも朗読しているように感じられることから、これを「朗読」（暗唱による「朗読」）のデータとして扱うこととする。

3. 分析

形式化した「言う」を含めデータは167件得られた。このうち1件は、肝心の「言」の部分が十分聞き取れないケースであった。したがって、実際の分析対象となるデータはこれを除いた166件である。

データは「朗読」と「インタビュー」の2種あるが、データ件数は次のとおりであった。

- ・「朗読」……………135件
- ・「インタビュー」… 31件

このうち「朗読」（135件）は、さらに「地の文」と、登場人物たちによる「会話文」に二分される。データ件数の内訳は次のとおりであった。

- ・「地の文」…………… 93件
- ・「会話文」…………… 42件

なお「会話文」の中には、実際には話し相手がある場にはいない、登場人物による心内発話も4件含まれている。たとえば、主人公の一人である美登利による次の心内発話である。（表記は現代のものに改めた。）

「私のことを「女郎女郎」と長吉づらにいわせるのもお前の指図」

以下では、活用語尾の発音別に語幹の発音の比較分析を行なうが、「言おう」のように活用語尾が「お」となるケースはたまたまデータがなかったことから、それ以外についての分析を行なう。

3.1. 「言う」の活用語尾が「う」の場合

活用語尾が「う」となるケースは79件あった。

直前の語幹「言」の発音の内訳は図1のとおりであった。

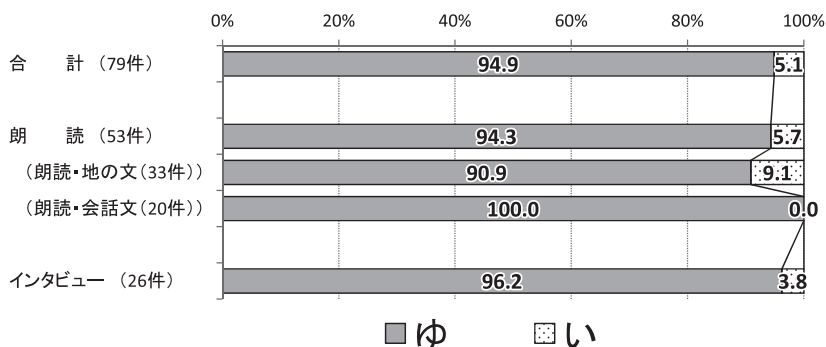


図1 活用語尾が「う」であるときの直前の語幹「言」の発音

「ゆ」で発音されたケースのうちの1件は、現代の共通語であれば促音便となる、次のウ音便によるものであった。

「うちの母（かか）さんがゆうていたっけ」

一方、「い」となるうちの1件は、現代の共通語であれば同様に促音便となる、次のウ音便によるものであった。ウ音便になると、直前の語幹は、先の例のように「ゆ」で発音されるのが一般的であるが、ここは「い」と聞こえる発音であった。

「用の無ければ、すれ違（ちご）うても物（を）いうた事なく」

さらに、「い」となるうちの1件は、語幹の発音が原文表記の「いふ」に従った「いう」であるが、活用語尾の方が若干「ゆ」にも聞こえる（つまり「いゆ」にも聞こえる）ケースであった。小説が始まったばかりの次の箇所である。

「これぞ熊手の下ごしらえという。」

図1によると、朗読の場合もインタビューの場合も、活用語尾が「う」のときは語幹が「ゆ」となるケースが大半を占めていることがわかる。逆に言えば、少数ではあるが、語幹が「い」となる「いう」も聞かれたということである。この点については朗読とインタビューの間に特に違いは認められないが、朗読においては、「会話文」(20件)では「いう」が全く認められないのに対し、「地の文」(33件)では「いう」が約1割見られる。朗読の中でも<読む>という要素がより強い「地の文」では、本来の「いう」という発音もある程度認められる点が注目される。

3.2. 「言う」の活用語尾が「い」の場合

活用語尾が「い」となるケースは31件あった。この中には「言いかける」「言い出す」のような複合動詞や、「言いつけ」のような複合動詞が名詞化したものも17件あった。

直前の語幹「言」の発音の内訳は図2のとおりであった。



図2 活用語尾が「い」であるときの直前の語幹「言」の発音

朗読では、「地の文」も「会話文」も全て「いい」であり、「ゆい」は全く聞かれなかった。インタビューでは該当するデータがなかったため朗読との比較はできない。

3.3. 「言う」の活用語尾が「っ」の場合

活用語尾が「っ」となるケースは13件あった。

直前の語幹「言」の発音の内訳は図3のとおりであった。

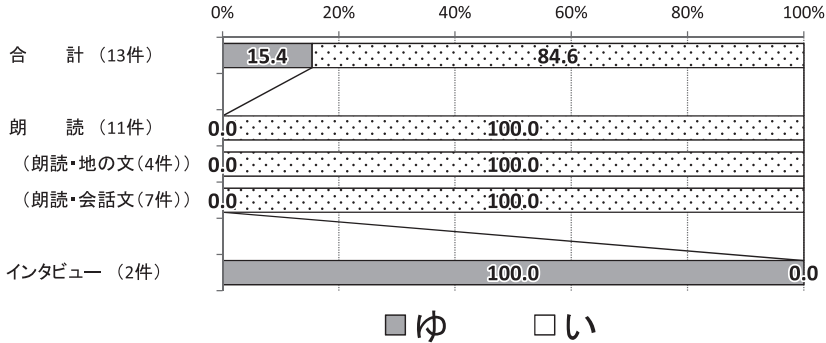


図3 活用語尾が「っ」であるときの直前の語幹「言」の発音

「合計」を見ると、「いっ」が極めて優勢であるものの、「ゆっ」も少数ながら聞かれる点が注目される。

その内訳を見ると、朗読では「地の文」も「会話文」も全て「いっ」であり「ゆっ」は全く聞かれなかったのに対し、インタビューでは、該当するデータはわずか2件にとどまるが、2件とも「ゆっ」である点が注目される。インタビューのデータが極めて少ないため確定的なことは言い難いが、ふだんの会話では「ゆっ」であっても、朗読では「いっ」で発音するという使い分け・切り替えがなされた可能性が考えられる興味深い結果である。

3.4. 「言う」の活用語尾が「わ」の場合

活用語尾が「わ」となるケースは30件あった。

直前の語幹「言」の発音の内訳は図4のとおりであった。

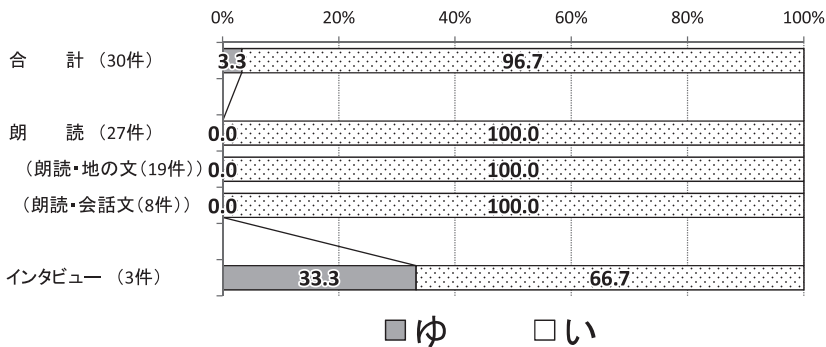


図4 活用語尾が「わ」であるときの直前の語幹「言」の発音

「合計」を見ると、「いわ」がほとんどであるものの、「ゆわ」もわずかながら聞かれる点が注目される。

その内訳を見ると、朗読では「地の文」も「会話文」も全て「いわ」であり「ゆわ」は全く聞かれなかったのに対し、インタビューでは、該当するデータはわずか3件にとどまるものの、このうちの1件は「ゆわ」である点が注目される。これもインタビューのデータが極めて少ないため確定的なことは言い難いが、ふだんの会話では「ゆわ」とも発音していても、朗読では「いわ」の

みで発音するという使い分け・切り替えがなされた可能性が考えられる興味深い結果である。

3.5. 「言う」の活用語尾が「え」の場合

活用語尾が「え」となるケースは13件あった。

直前の語幹「言」の発音の内訳は図5のとおりであった。



図5 活用語尾が「え」であるときの直前の語幹「言」の発音

朗読では、「地の文」も「会話文」も全て「いえ」であり、「ゆえ」は全く聞かれなかった。インタビューでは該当するデータがなかったため、朗読との比較はできない。

3.6. 「言う」の活用語尾別に見た語幹の発音

参考資料として、活用語尾別に見た語幹の発音を、朗読の場合とインタビューの場合に分けて示す。朗読については「地の文」と「会話文」に分けた場合も示す。図6～図9のとおりであった。

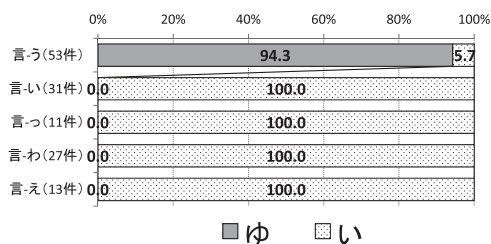


図6 活用語尾別の発音 (朗読・合計)

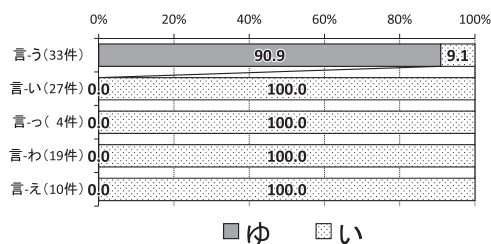


図7 活用語尾別の発音 (朗読・地の文)

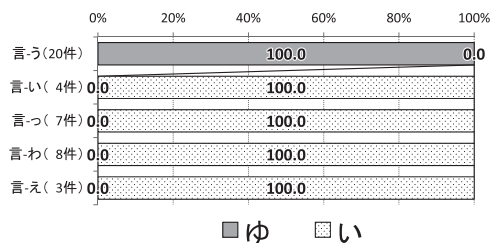


図8 活用語尾別の発音 (朗読・会話文)

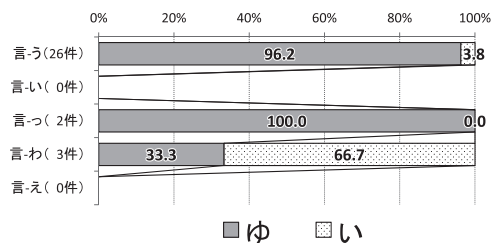


図9 活用語尾別の発音 (インタビュー)

朗読の場合、活用語尾が「う」のときは、「地の文」も「会話文」もほとんどが「ゆう」であること、「いう」が現れるのは「会話文」ではなく<読む>という要素がより強い「地の文」の方においてであることが改めて確認される。活用語尾が「う」以外のときは、語幹は全て「い」である。基本的に、活用語尾により語幹の発音が決まってくると見てよい。

これに対しインタビューでは、活用語尾が「う」のときは、朗読の場合と同様にほとんどが「ゆう」であるが、該当データが少ないため確定的なことは言い難いが、活用語尾が「っ」や「わ」のときにも「ゆっ」や「ゆわ」のように「ゆ」が現れる。すなわち、普段の会話では語幹の発音が「ゆ」であっても、朗読のような言葉を強く意識すると考えられる状況では、本来の発音である「いっ」「いわ」への切り替えがなされている可能性が考えられる。

4. まとめと今後の課題

朗読家・幸田弘子氏の「朗読」と「インタビュー」の発音を対比して分析したところ、該当データが少ないことから確定的なことは言い難いものの、通常の会話では「ゆ」と発音していても、朗読においては本来の「い」で発音するケースがあるらしいことを指摘した。

今回の調査は、研究ノートとしてのパイロット調査にとどまったが、今後は組織的かつ大量にデータを収集・分析し、こうした発音の切り替え・使い分けが確実に存在するか、またいろいろな人に当てはまる現象であるのかを明らかにしていく必要がある。

参考文献

尾崎喜光 (2017) 「「言う」の発音に関する研究」『清心語文』19